

堀
辰雄

曠
野



曠^あ_ら

野^の

忘れぬる君はなかなかつらからで
いままで生ける身をぞ恨むる

拾遺集

一

そのころ西の京の六条のほとりになかつかさのたいふ中務大輔なにがし
という人が住まっていた。昔気質の人で、世の中からは
忘れられてしまったように、親譲りの、松の木のおおい、
大きな屋形やかたの、住み古した西の対たいに、老妻と一しよに、
一人の娘を鍾愛いづくしみながら、もの静かな朝夕を過ごして
いた。

ようやくその一人娘がおとなびて来ると、ふた親は自分らの生先おいさきの少ないことを考えて、自分らのほかには頼りにするもののない娘の行末を案じ、種々いろいろいい寄って来るものうちから、ある兵衛ひょうえ佐を選んでそれに娘をめあわせた。ふた親の心になつたその若者は、何もかもよく出来た人柄だつた上、その娘の美しさに夢中になつてしまつてゐることは、はた目にもあきらかだつた。そうしてそれから二三年がほどというものは、誰にとつても、何もいうところのない月日だつた。

が、そうやって世の中からほとんど隔絶してゐるうち

に、その中務大輔のところでは暮らし向きの悪くなつてゆく一方であることは、毎日女のもとに通つて来る壻むこにもようやくはつきりと分かるようになった。そのなかでは、男だけは以前と変わらずに手厚いもてなしを受けてはいた。それはかえつて男には心苦しかった。が、女との語らいは深まる一方だったので、男はその女のもとをばもはや離れがたく思うようになっていた。

ところが、ある年の冬、中務大輔は俄かに煩ないついて亡なき人の数に入った。それから引きつづいて女の母もそのあとを追つた。女は悲歎なげきのなかに一人きりに取り残され

て、全く途方に暮れずにはいられなかった。もちろん、男は相変らず夜毎に来て、そういう女をいたわり尽してはくれた。だが、世の中を知らない二人だけでは、すべてのことがいよいよ思うにまかせなくなつて来ることは、しかた為方がなかった。毎日宮みやづかえ仕に出てゆく男のためにもそれまでのように支度を調ととのえることも出来悪かった。それがことに女には苦しかったけれども、どうすることもその力には及ばなかった。

再び春の立ち返つたある夕方、女は端近くにいた夫を前にして、この日頃思いつめていたことを口にする決心

がやつとそのときついたように、こんなことを言い出した。

「わたくしたちもこのままこうして暮らしておりましては、あなた様のおためではないのがやつとはつきりと分って参りました。父母のおりました間は、それでもまだ何かとお支度などもお調えしてさし上げられておりました。けれども、こう何かと不如意ふによいになつて来ましては、それも思うにまかせなくなり、お出仕の折などにさぞ見苦しいお思いもなされることがおありでございましてよ。ほんとうに私のことなどは構いませぬから、どうぞ

あなた様のお為めになるようになすつて下さいませ」

男はじつと黙って聞いていた。それから急に女を遮さへぎった。「ではこの己おれにどうせよといわれるのか」

「ときどきわたくしのことが可哀そうにお思いになりましたなら——」女は切なげに返事をした。「余所よそへいらしつていても、その折にはどうぞいつでも入らつして下さいませ。どうしていまのままでは、見苦しい思いをなさらずに宮仕などがお出来になれましょう」

男はしばらく目をつぶって聞いていた。それから急に男は女のほうへ目を上げ、素気ないほどきっぱりと言つ

た。

「この己にこのままおまえを置きざりにして往かれると
思うのか」

それきりで、男はわざと冷やかそうに顔をそむけ、破
れた築土ついでじのうえに葎むぐらがやさしい若葉を生やしかけてい
るのを、そのときはじめて気がついたように見やっってい
た。

やがて女のやつとこらえていたような忍び泣きが急に
はげしい嗚咽おえつに変わっていった。……

男は、そうやって女のほうから別れ話をもち出されてからも、一日も欠かさず女のもとに来ながら、以前とはすこしも変わらないように女と暮らしていた。しかしだんだん女の家から召使いの男女の数も乏しくなり、築土なども破れがちになって来、家に伝わった立派な調度などもいつか一つずつ失われてゆき出しているのが、男の目にもいつまでも分らないはずはなかった。男の様子が昔から見るとよほど変ってきて、以前よりか一層寡黙むくちになりだしたように見えたのは、それから程経てのことだった。しかし男はその様子がそう少し変っただけで、女を

いよいよいたわり尽すようにしていた。それが逢うごとに女にはたまらなく思われて、どうしたらいいのか、ただもうあぐね果てるばかりだった。

とうとうまた、ある夕方、女はこらえかねたように言
った。

「いつまでもこうしてわたくしと一緒にいて下さるのは、わたくしは嬉しがらなくてはならないのですが、どうもそれ以上に心苦しくてなりません。わたくしはこうしてあなたのお傍におりましても、あなたのおやつ窠れになつたお姿を見ることが出来ませぬ。のみならず、こ

の頃あなた様はわたくしに隠して、何かお考えになつていらつしやるのでしよう。なぜそれをわたくしに言つては下さらぬのです」

男は物を言わずに、女をしばらく見ていた。

「己がおまえに隠して考えごとなどをしているものか」と男は何か言いにくそうに口をきいた。「おまえが自分のことに構わずに、己のことばかり構おうとしているのが己には窮屈でならないのだ。己だって、もう少ししたら、どうにかなるだろう。そうすれば、おまえ一人ぐらいはどうにでもしてやれるのだ。それまで、いま少し、

辛抱していてくれ」

男はそう言ながら、ひと時、いかにもいたいたしそうな目つきで女を見た。しかし女はいつかそこに袖を顔にして泣き伏していた。男はしげしげと女の波うっている黒髪を見ていた。それから自分も急に目をそらせて、ふいと袖を顔にもっていった。

男がその女の家に姿を見せなくなったのは、それから何日もたたないうちだった。

二

男が黙ってふいに立ち去ってから、それでも女はなお男を心待ちにしながら、幾人かの召使いを相手に、さびしい、便り^{たよ}ない暮らしを続けていた。が、それきり男からは絶えて消息さえもなかった。女にとっては、それは自分から望んだこととはいえ、たまらなく不安だった。待つことの苦しみ、——何物も、それを紛^{まぎ}らせてはくれなかった。それでも女はまだしもそのなかに一種の満足

を見いだし得た。——だが、いつまで立っても、男のかえって来るあてのないことが分かって来ると、わずかに残っていた召使いも誰からともなく暇をとり出し、みな散り散りに立ち去って往つた。

一年ばかりのあとには、女のもとにはもう幼い童が一人しか残っていないかった。その間に、寝殿しんでんは跡方もなくなり、庭の奥に植わっていた古い松の木もいつか伐り取られ、草ばかり生い茂って、いつのまにか葎むぐらのからみついた門などはもう開ひらかなくなっていた。そうして築土のくずれがいよいよひどくなり、ときおり何かの花な

どを手にした裸か足の童がいまはそこから勝手に出はいりしている様子だった。

なかば傾いた西の対たいの端に、わずかに雨露をしのぎながら、女はそれでもじっと何物かを待ち続けていた。

最後まで残っていた幼い童もとうとうどこかに去ってしまった跡には、もう一方の崩れ残りの東の対の一角に、この頃田舎いなかから上ってきた年老いた尼が一人、ほかに往くところもないらしく、棲すみついていた。それは昔この屋形やかたで使われていた召使いの縁者だった。そうしてその尼はこの女をかわいそうに思って、ときどき余所よそから貰

ってくる菓子や食物などを持って来てくれた。しかしこの頃はもう女にはその日のことにも事を欠くことが多くなり出していった。——それでもなお女はそこを離れずに、何物かを待ち続けているのを止めなかった。

「あの方さえお為しあわ合せになっていて下されば、わたくしはこのまま朽くちてもいい」

そう思うことの出来た女は、かならずしも、まだ不為合せではなかった。

男にとっては、その一二年の月日はまたたく間に過ぎ

た。

しかしその間、男は一日も前の妻のことを忘れたことはなかった。が、何かと宮仕が忙しかった上、あらたに通い出していた伊予いよの守かみの女の家で、懇ねんごろに世話をせられていると、心のまめやかな男だっただけ、彼らを裏切らないためにも、男はつとめて前の妻のところからは遠ざかり、胸のうちでは気にながらも、音信さえ絶やしていた。

最初のうちは、それでも男は幾たびか、人目に立たないようにならざと日の暮を選んで、前の女のいる西の京の

方へ往きかけた。が、朝夕通いなれた小路に近づいて来ると、急に何物かに阻はばまれるような心もちで、男はそのまま引っ返して来た。男はこんなことで、心にもなく女とも別れなければなくなる運命を考えた。

しかし、そのまま女にも逢わずに月日が立つにつれ、もう忘れていてもいいはずのその女のことを何かのはずみに思い出すと、その女の、袖を顔にした、さびしい、俯伏うつぶした姿が前にも増して鮮明に胸に浮んで来てならなかった。そうしてとうとうしまいには、その女のそうしているときの息づかいや、やさしい衣きぬずれの音までがま

ざまざと蘇るようになり出した。

その春も末にちかい、ある日の暮れがた、男はとうとう女恋しさにいてもたってもいられなくなったように、思い切って西の京の方へ出かけて往った。

そこいらは小路の両側の、築土ついでじも崩れがちで、蓬よもぎのはびこった、人の住まっていない破れ家の多いようなところだった。ようやく以前通いなれた女の家のあたりまで来て見ると、倒れかかった門には葎むぐらの若葉がしげり、藪やぶには山吹らしいものがしどろに咲きみだれていた。

「こんなに荒れているようでは、もう誰もここにはいま

い」男は心のなかでそう考えた。

おそらくその女も他の男に見いだされて余所よそに引きとられてしまったのだらうと詮あきらめると、その女恋しさを一層切ひとしおに感じ出しながら、そのままでは何か立ち去りがたいように、男はなおあたりを歩いていた。すると、築土のくずれが、一ところ、童でもふみあげたのか、人の通れるほどになっていた。男は何の気なしにそこからはいつて見ると、もとは何本もあつた大きな松の木はたいてい伐り倒されて、いまは草ばかりが生い茂っていた。古池のまわりには、一めんめんに山吹が咲きみだれてい、そ

のずっと向うの半ば傾いた西の対たいの上にちようど夕月のかかっているのが、男にははじめてそれと認められた。その対たいの屋やの方は真っ暗で、人気はないらしかった。それでも男はそちらに向って女の名を呼んで見た。もちろん、なんの返事もなかった。そうになると男は女恋しさをいよいよ切に感じ出し、袖にかかる蜘蛛くもの網いを払いながら、山吹の茂みのなかを掻き分けていった。男はもう一度空しく女の名を呼んだ。男はそのとき思いがけず反対の側にある対の屋からかすかな灯の洩れているのを見つけた。男は胸を刺されるような思いをしながら、そちらの

方へさらに草を掻き分けて往って、最後に女の名を呼んだ。返事のないのは前と変りはなかった。男は草の中からそこには一人の尼かなんぞいるらしいけはいを確かめると、頭を垂たれたまま、もと来た道をあとへ引つ返した。もう昔の女には逢われないのだと詮あきらめ切ると、それまで男の胸を苦しいほど充たしていた女恋しさは、突然、いい知れず昔なつかしいような、ほとんど快いもの思いに変わりだした。……

なかば傾いた西の対の、破れかかった妻戸つまどのかげに、

その夕べも、女は昼間から空にほのかにかかっていた。纖ほそい月をぼんやり眺めているうちに、いつか暗やみにまぎれながらほとんどあるかないかに臥ふせっていた。

そのうちに女は不意といぶかしそうに身を起した。どこやらで自分の名が呼ばれたような気がした。女の心はすこしも驚かされなかった。それはこれまでも幾たびか空耳にきいた男の声だった。そうしてそのときもそれは自分の心の迷いだとおもった。が、それからしばらくそのままじっと身を起していると、こんどは空耳とは信ぜられないほどはつきりと同じ声がした。女は急に手足が

竦むように覺えた。そうして女はほとんどわれを忘れて、いそいで自分の小さな体を色の褪めた蘇芳すおうの衣のなかに隠したのがやつとのことだった。女には自分が見るかげもなく瘦せやさらばえて、あさましいような姿になっっているのがそのとき初めて気がついたように見えた。たとい気がついていたにせよ、そのときまではほとんど気にもならなかった、自分のそういうみじめな姿が、そんなになつてまだ自分の待っていた男に見られることが急に空怖ろしくなったのだった。そうして女は何も返事をしようとはせず、ただもう息をつめていることしか出来なく

なっている自分の運命を、われながらせつなく思うばかりだった。それからまだしばらく池のほとりで草の中を人の歩きまわっている物音が聞えていた。最後に男の聲がしたときは、もう女のいる対の屋からは遠のいて、向いの尼のいる対の屋の方へ近づき出しているらしかった。それからもう何んの物音もしなくなった。

すべては失われてしまったのだ。男はそこにいた。そこにいたことはたしかだ。それを女にたしかめでもするよう、男の歩み去った山吹の茂みの上には、まだ蜘蛛くもの網いが破れたままいくすじか垂れさがって夕月に光って見え

た。女はそのまま荒あばらな板敷のうえにいつまでも泣き伏
していた。……

三

それから半年ばかり立った。

近江おうみの国から、ある郡司ぐんじの息子が宿直のために京に上
つて来て、そのおばにあたる尼のもとに泊ることになっ
たのは、ちょうど秋の末のことだった。

それから何日かの後、郡司の息子が異様に目を赫かがやか

せながら言った。「きのうの夕方、向うの壊れ残りの寢殿しんでんに焚たきものを捜しに往きますと、西の対にちようど夕日が一ぱいさし込んでいて、破れた簾すだれごしにまだ若そうな女のひとが一人、いかにも物思わしげに臥ふせているのがくつきりと見えましましたので、私はおどろいてそのまま帰って来てしまいました。あれはどなたなのですか」

尼は当惑そうに、しかしもう見つけられてしまつては為しかた方がないように、その女の不為合せな境きようがい涯を話してきかせた。郡司の息子はさも同情に堪えないように、最後まで熱心に聞いていた。

「そのお方にぜひとも逢わせて下さい」息子は再び目を異様に赫かがやかせながら、田舎者らしい率直さで言った。

「そのお方のほうでもその気になって下されば、わたしが国へ帰るとき一緒にお伴つれして、もうそのようなお心細い目には逢わせませんから」

尼は、それを聞くと、まあこんな自分の甥おいごときものがと思いながら、それでも彼の言うように女も一そそんな気もちにでもなった方が行末のためにもなるのではないかと考えもした。

尼はいくぶん躊躇ちゆうちよしながらも、いつかその甥の申出

を女に伝えることを諾うべなわないわけにはいかなかった。

ある野分のわき立った朝、尼はその女のもとに菓子などを持って来ながら、いつものように色の腿さめた衣をかついだ女を前にして、何か慰めるように、

「あなた様もどうしてこのままでいつまでもいられますよう」と言いだした。「こんなことはわたくしとしては申し上げ悪いことですけれど、いまわたくしの所に近江からいささか由縁ゆかりのありますものの御子息が上京せられて来ておられますが、そのものがあなた様のお身の上を

知って、ぜひとも国へお伴れしたいと熱心にお言いにな
っておりますけれど、いかがでございましょうか、一そ
そのもののお言葉に従いました。このままこうして入
らっしゃいますよりは、少しはましかと存じますが」

女はそれには何にも返事をしないで、空しい目を上げ
て、ときおり風に乱れている花薄すすきの上にちぎれちぎれ
に漂っている雲のたたずまいを何か気にするように眺め
やっていたが、急に「そうだ、わたくしはもうあの方に
は逢われないのだ」とそんなあらぬ思いを誘われて、突
然そこに俯伏してしまった。

夜なかなどに、ときおり郡司の息子が弓などを手にして、女の住んでいる対の屋のあたりを犬などに吠えられながらいつまでもさまようようになったのは、そんなことがあってからのことだった。夜もすがら、木がらしが萩^{はぎ}や薄^{すすぎ}などをさびびしい音を立てさせていた。どうかすると、ひとしきり時雨の過ぎる音がそれに交じって聞えたりした。そうでなければ、郡司の息子が、ときどき自分^{自分}の怖ろしさを紛らせようとしてもするのか、あちこちと草の中を歩きまわっていた。……

そんな夜ごとに、女は妻戸をしめ切って、ともし火も

つけず、身の置きどころもないかのように、色の腿めた衣をかついだまま、奥のほうにじつとうずくまっていた。かくも荒れはてた棲み家では、奥ぶかくなどにじつとしている、そのまま何かの物のけにでも引っ張り込まれていってしまいそうな気がされて、女は怯え^{おび}切り、ほとんど寐られずに過ぎすことが多いのだった。

あるしぐれた夕方、尼は女のところに来ると、いつものように沁々^{しみじみ}と話し込んでいた。

「ほんとうにいつまで昔のままのお気もちでいらっしやるのでございましょう」尼はことさらに歎息するように

言った。「それは今のようにならなくてもいいから、まだしも、このわたくしでももしものことがございましたら、どうなさるおつもりなんでしょうか。しかし、やがてそういうときの来ることには分かっています」

女は数日まえのことを思い出した。——数日まえ、尼にその話をはじめて切り出されたとき、突然はつとして「自分はもうあのお方には逢われないのだ」と気づいたときのいまにも胸の裂けそうな思いのしたことを思い出した。あるときから女の心もちは急に弱くなった。それまでのすべての気強さは——ひっきょう畢竟、それはいつかは男

に逢えると思つての上での氣強さであつた。——女はもう以前の女ではなかつた。

その晩、尼は郡司の息子をその女のもとへ忍ばせてやつた。

それから夜ごとに郡司の息子は女のもとへ通い出した。

女はもう詮方せんかた尽きたもののように、そんなものにまですべてをまかせるほかなくなつた自分の身が、何だかいとおしくていとおしくてならないような、いかにも悔くや

しい思いをしながら、その男に逢いつづけていた。

ようやく任が果てて、その冬のはじめに近江へ帰らなければならなくなったときには、郡司の息子はもうすっかりこの女に睦むつんで、どうしてもそのまま女を置きざりにして往く気にはなれずじまつた。

女はそれを強いられるままに、京を離れるのはいかにもつらかったけれど、しかし自分の余りにもつたなかつた来こしかたに抗あがらうような、そうして何か自分の運を試ためしてみるような心もちにもなりながら、その郡司の息子について近江に下っていった。

四

しかしその郡司の息子には、国元には、二三年前にめとった妻が残してあった。そうして親たちの手まえもあり、息子は、その京の女をおもてむきはしため婢として伴れ戻らなければならなかった。

「そのうちまた、わたくしは京に上るはずですよ」息子は女を宥なだめるようにして言った。「その折にはきつと妻として伴れて往きますから、それまで辛抱していて下さい」「

女はそんな事情を知ると、胸が裂けるかと思うほど、泣いて、泣いて、泣き通した。——すべての運命がそこにうち挫くじかれた。

が、一月たち二月たちしているうちに、——ほとんど誰にも気どられずに婢として仕えているうちに、——こうしている現在の自分がそのままでまるきり自分にも見ず知らずのものでもあるかのような、空虚うつろな気もちのする日々が過すごされた。いままでの不為合こせな来こしかたが自分にさえ忘れ去られてしまっているような、——そうして、そこには、自分が横切ってきた境涯のわきだけが、野分

のあとの、うら枯れた、見どころのない、曠野あらののように
しらじらと残っているばかりであつた。「いつそもうこ
うして婢はしためとして誰にも知られずに一生を終えたい」
——女はいつかそうも考えるようになった。

ここに、女は、まったく不為合せなものとなつた。
山一つ隔てただけで、こちらは、梢こずえにひびく木がら
しの音も京よりは思ひのほかにはげしかつた。夜もすが
ら、みずうみの上を啼き渡つてゆく雁かりもまた、女にとつ
ては、夜々をいよいよ寢覚めがちなものとならせた。

それから数年後の、ある年の秋、その近江の国にあたらしい国^{くにのかみ}守が赴任して来て、国中が何かとさわぎ立っていた。

国内の巡視に出た近江の守の一行が、方々まわって歩いて、その郡司の館のある^{みづうみ}湖にちかい村にかかったときは、ちょうど冬の初で、比良^{ひら}の山にはもう雪のすこし見え出した頃だった。

その日の夕ぐれ、丘の上にあるその館では、守^{かみ}は郡司たちを相手にして酒を酌^くみかわしていた。

館のうえには時おり千鳥のよびかう声が鋭く短くきこ

えた。——すっかり葉の落ち尽した柿かきの木の向うには、
枯蘆かれあしのかなたに、まだほの明るいみずうみの上がひっそ
りと眺められた。

守かみは、すこし微醺びくんを帯びたまま、郡司が雪深い越こしに下
っている息子の自慢話などをして、のをききながら、
折敷おしきや菓子などを運んでくる男女の下衆げすたちのなかに、
一人の小がらな女に目をとめて、それへじつと熱心な眼
ざしをそそいでいた。他の婢と同様に、髪は巻きあげ、
衣も粗末なのをまどってはいしたが、その女はどこやら
由緒ゆいしよありそうに、いかにも哀れげに見えた。その女をは

じめて見たときから、守の心はふしぎに動いた。

宴の果てる頃、守は一人の小舎人童こどねわらわを近くに呼ぶと、何かこっそりと耳打ちをした。

その夜遅く、京の女は郡司のもとに招ぜられた。郡司は女に一枚の小桂こうちぎを与えて、髪なども梳すいて、よく化粧してくるようと言いつけた。女は何んのことか分からなかったが、命ぜられたとおりのことをして、再び郡司の前に出ていった。

郡司はその女の小桂姿を見ると、傍らの妻をかえりみ

ながら、機嫌好きそうに言った。

「さすがは京の女じゃ。化粧させると、見まちがうほど
美しゆうなつた」

それから女は郡司に客舎の方へ伴れて往かれた。女は
やっと事情が分つて来ても、押し黙つて、郡司のあとに
ついてゆきながら、何かある強い力に引きずられて行き
でもしているような空虚な自分をしか見出せなかつた。

守の前に出されると、ほのぐらいほかげ火影に背を向けたま
ま、女は顔に袖を押しつけるようにしてうずくまつた。

「おまえは京だそうだな」守はそこに小さくなっている

女のうしろ姿を気の毒そうに見やりながら、いたわるように問うた。

「……」女はしかし何とも答えなかった。

そうして女は数年まえのことを思い出した。——数年まえには、田舎上りの見ず知らずの男に身をまかせて京を離れなければならなかった自分が自分でもかわいそうでかわいそうでならなかった。そうしてそのときは相手の男なんぞはいくらでもさげすめられた。が、こんどと云うこんどは、その相手がかえって立派そうなお方であるだけに、そういう相手のいいなりになろうとしている

自分が何だか自分でもさげすまずにはいられないような——そうしていくら相手のお方にさげすまれても為方のないような——無性にさびしい気もちがするばかりだった。女にしてみると、こうして見出されるよりは、いままでのように誰にも気づかれずに婢としてはかなく埋もれていた方がどんなに益ましか知れなかった。……

「己はおまえをどこかで見たようなふしぎな気がしてならない」男はもの静かに言った。

女は相変らず袖を顔にしたぎり、何んといわれようと、ものう懶げに顔を振っているばかりだった。

館のそとには、時おりみずうみの波の音が忍びやかに
きこえていた。

そのあくる夜も、女は守のまえかみに呼ばれると、いよいよ身の置きどころもないように、いかにもかぼそげに、袖を顔にしなからそこにうずくまっていた。女は相変らず一ことも物を言わなかった。

夜もすがら、木がらしめいた風が裏山をめぐるっていた。その風がやむと、みずうみの波の音がゆうべよりかずつとはつきりと聞えてきた。おりおり遠くで千鳥らしい声

がそれに交じることもある。守はいたわるように女をかきよせながら、そんなさびしい風の音などをきいているうちに、なぜか、ふと自分がまだ若くて兵衛佐だった頃に夜毎に通っていたある女のおもかげを鮮かに胸のうちに浮べた。男は急に胸騒ぎがした。

「いや、己の心の迷いだ」男はその胸の静まるのを待っていた。

突然、男の顔から涙がとめどなくながれて女の髪に伝わった。女はそれに気がつくど、いかにも不審に堪えないうように、小さな顔をはじめて男のほうへ上げた。

男は女とおもわず目を合わせると、急に気でも狂ったように、女を抱きすくめた。

「やはりおまえだったのか」

女はそれを聞いたとき、何やらかすかに叫んで、男の腕からのがれようとした。力のかぎりののがれようとした。

「己だと云うことが分かったか」男は女をしつかりと抱きしめたまま、声を顫ふるわせて言った。

女は衣きぬずれの音を立てながら、なおも必死にのがれようとした。が、急に何か叫んだきり、男に体を預けてしまった。

男は慌あわてて女を抱き起した。しかし、女の手に触れると、男は一層慌あわてずにはいられなかった。

「しっかりしていきなさい」男は女の背を撫でながら、やっといま自分に返されたこの女、——この女ほど自分に近しい、これほど貴重だいじなものはいないのだということがはっきりと身にしみて分かった。——そうしてこの不為合せな女、前の夫を行きずりの男だと思い込んで行きずりの男に身をまかせると同じような詮あきらめあきで身をまかせていたこの惨みじめな女、この女こそこの世で自分のめぐりあうことの出来た唯一の為合せであることをはじめて悟

ったのだった。

しかし女は苦しそうに男に抱かれたまま、一度だけ目を大きく見ひらいて男の顔をいぶかしそうに見つめたぎり、だんだん死顔に変わりだしていた。……

日本文学電子図書館

「堀辰雄 日本の文学42」

著 者：堀 辰雄

制作者：宮澤一郎

出版社：中央公論社

昭和39年9月5日発行



日本文学電子図書館